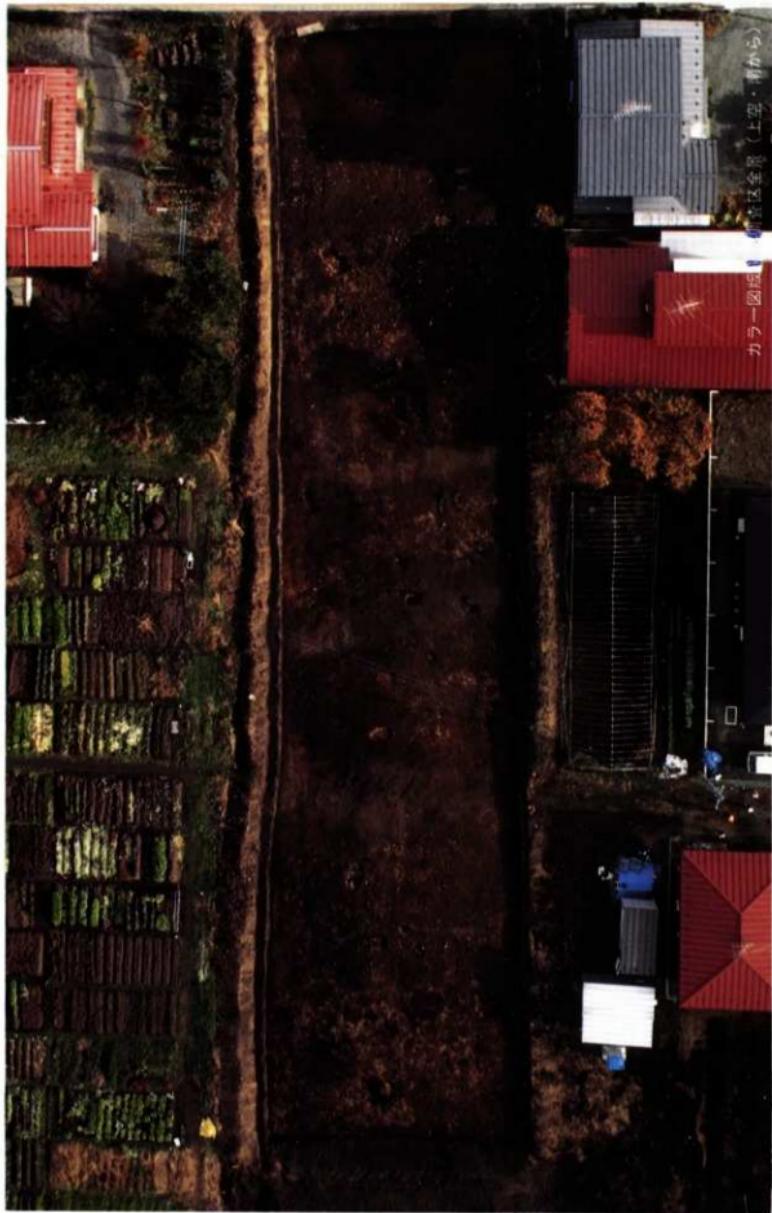


杉 の 堂 遺 跡

1996

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター
水沢市農業協同組合



金剛（上空・西から）

カラ一園場



カラー図版2 上 調査区全景（南西から）
下 調査区東半（北東から）



カラー図版3 上 S102竪穴住居跡（南西から）

下 S104竪穴住居跡（北東から）

序 文

平成7年度における水沢市埋蔵文化財調査センターの遺跡発掘調査結果について
まして報告申し上げます。

当センター発足2年目をむかえ、昨年同様の視点にたち、単なる発掘調査に終わるだけでなく、それらの文化財の秘める貴重な意義について理解し、保護しようとする心を育むための啓発活動として、出土遺物の展示公開、考古学研修講座や考古学教室の開催、講演会（今年度は三内丸山遺跡と平泉柳之御所跡についてと、胆沢城跡発掘40年を振り返ってなど）を実施致してまいりました。

現在、水沢市内には270か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。今年度は更に9か所を発掘調査致しました（東大畠Ⅰ遺跡、十日市屋敷跡、林前Ⅰ遺跡2か所、龍ヶ馬場Ⅱ遺跡、雷神Ⅰ遺跡、杉の堂遺跡、仙人西遺跡、胆沢城跡）。胆沢城跡を除き8か所の調査は、県立病院や国道バイパス工事に伴う開発計画、及び住宅建設のためのものであります。従来の考え方「まずは文化財の保護」と、現在の考え方「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」という考え方の変化の狭間にあって、発掘調査の任務にあたる私どもは、消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を課せられていることを深く自覚しなければなりません。当然のことですがこのことを所員一同心して報告書作成にあたりました。

また、各遺跡の発掘状況や結果については、その都度、所報「鎮守府胆沢城」や所内に図版、写真など掲示したり遺物を展示してお目にかけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、文化庁、岩手県教育委員会文化課、県埋蔵文化財センターはじめ多くの方々の御指導、御助言を戴きました。厚く御礼申し上げます。

尚、今後とも一層の関係各位の御理解と御協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成8年3月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター
所長 及川由己

例　　言

1. 本書は、岩手県水沢市神明町二丁目75-1, 80に所在する杉の堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宅地造成に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。
3. 杉の堂遺跡の調査対象面積は1,800m²であり、うち調査実施面積は1,313m²である。
4. 発掘調査期間は平成7年10月21日～平成7年12月10日であり、以後、平成8年3月31日まで室内整理作業を行った。
5. 発掘調査・本書の執筆編集は佐々木千鶴子、高橋千晶が担当した。
執筆分担は、I章佐々木、II章佐々木・高橋、III章佐々木である。
6. 本書で使用する遺構表示略記号は下記による。
SI：竪穴住居跡 SD：溝跡 SA：ピット、柱列 SK：土坑跡 SX：不明遺構
7. 本書で使用しているグリッドは、調査区の南約55mの所に任意に起点を設定し（第2図参照）、道路沿いに北へ延長したものである。また、本文中で使用の方位は磁北を基準とし、磁北に対する南北の基準線はN25°13' Eの角度を持つ。
8. 報告书中で触れた土層・遺物の注記に関しては、小山正忠・竹原英雄『新版 標準土色帖』（1994年版）を使用している。
9. 発掘調査および室内作業においては、以下の方々の御協力をいただいた。（五十音順・敬称略）
阿部陽紀子、伊藤愛子、伊藤アサ、及川レイ子、小野芳子、亀井恵美公、菊池マツヨ、菊地ヨシ子、熊谷庄吾、熊谷ミヨ、佐々木ケイ子、佐藤アエ子、宮田貞實、宮田久子、渡辺誠一、渡辺トキ子、和田しげ子（以上発掘調査）。青木綾子、猪狩清美、伊藤栄子、小野寺ふく子、小野寺陽子、千田サノ子、村沢貴美子、渡辺弘子（以上発掘調査兼室内作業）。佐藤トモ子、高橋久美子、千田佳史子（以上室内作業）。
10. 調査の実施に際しては、水沢市農業協同組合の協力を得た。記して謝意を表する。

目 次

序 文

例 言・目 次

I. 遺跡の位置と環境	2
II. 遺構・遺物	
SI01堅穴住居跡	7
SI02堅穴住居跡	10
SI03堅穴住居跡	12
SI04堅穴住居跡	13
SK05・SX07土坑跡	14
SK08・09・10・12・14・15・17・18・19土坑跡	15
SK20・22・23土坑跡、SD11溝跡、SA06・13・16・21ピット群	17
遺構外出土遺物	19
III. まとめ	19
報告書抄録	49

図 版 目 次

カラー図版（口絵）1 調査区全景写真（上空・南から）

同 2 調査区東半（上空から）

..... 調査区全景（西から）

同 3 SI02堅穴住居跡

..... SI04堅穴住居跡

図版1 調査区全景写真（上空から）

図版8 SK05・SX07・SK08土坑跡

図版2 調査区東半（上空から）

図版9 SK09・10土坑跡

..... 調査区全景（西から）

図版10 SK14・15土坑跡

図版3 SI01堅穴住居跡

図版11 SK17・18・19土坑跡

図版4 SI01堅穴住居跡貯藏穴

図版12 SK22・23土坑跡、SD11溝跡

..... SI02堅穴住居跡

図版13 SI01堅穴住居跡出土遺物

図版5 SI02堅穴住居跡カマド部分

図版14 SI02堅穴住居跡出土遺物

..... SI03堅穴住居跡

..... SI03堅穴住居跡出土遺物

図版6 SI03堅穴住居跡カマド部分

..... SI04堅穴住居跡出土遺物

..... SI04堅穴住居跡

図版7 SI04堅穴住居跡カマド部分

..... SK24土坑跡

I. 遺跡の位置と環境

杉の堂遺跡は水沢市街地の東方約2km、水沢段丘上位面の北東辺縁部に広がる跡呂井遺跡群の東端に位置する。遺跡の北方は水沢段丘下位面の谷底平野を臨み、段丘崖に限られ、崖下には小川が流れる。東方は北上川の浸食崖により限られる。段丘辺縁部には東西方向に小支谷が入り込み、現在国道397号線として標高41m前後の平坦面を画している。

遺跡の西には跡呂井中陣場遺跡（中世前期）、跡呂井中陣場西遺跡（平安時代）、跡呂井館跡（奈良・中世）などの跡呂井遺跡群が連なり、国道397号線で画された南には奈良時代の大規模集落跡である熊之堂遺跡がある。

本遺跡は佐倉河字杉の堂地内その他、神明町二丁目、東大通り二丁目、真城字熊之堂の1部を含む広範囲にわたっているため、便宜上、北縁辺の段丘崖寄りの地区を杉の堂坂口遺跡として、北西縁辺地区を跡呂井二ツ塹遺跡としても報告されている。これを含めると、昭和34・35・55・56（2か所）^(註1)・^(註2)・^(註3)・^(註4)・^(註5)・^(註6)・^(註7)・^(註8)・^(註9)61・62・63年、平成3年の10次にわたる調査が行われている。従来の調査によって、繩文時代晩期の分布主体は東寄りの段丘崖に沿ってあることが判明している。さらに南縁辺と北縁辺では、奈良時代後半から平安時代にわたる集落の存在が判明している。

今回の調査に關係する古代の遺構に関しては、昭和56年度調査（第2図4）では奈良時代末～平安時代の竪穴住居跡16棟、焼土遺構3基、土坑跡8基、溝跡2条を検出。昭和61年度調査（同5）では奈良時代後半～平安時代の竪穴住居跡3棟、土坑跡8基を検出。昭和62年度調査（同6）では平安時代前半の竪穴住居跡2棟、土坑跡1基を検出。昭和63年度調査（同7）では奈良時代後半～平安時代初頭の竪穴住居跡1棟を検出。平成3年度調査（同8）では平安時代の竪穴住居跡4棟、土坑跡1基を検出している。また、昭和50年度にはリング移植坑の中から奈良時代の竪穴住居跡のカマド部分が検出され、土師器・土製支脚などが採集されている。

以上の26棟の住居跡の存在から、奈良時代～平安時代に至る集落の様相が明らかになりつつある。今回の発掘調査は從来、杉の堂坂口遺跡としても報告されている北縁辺の段丘崖寄りの地点で行った。

註1 林謙作『杉の堂遺跡－第3次発掘調査概報－』水沢市教育委員会 1981年

註2 同 『杉の堂遺跡－第4次発掘調査概報－』同 1982年

註3 同 『杉の堂遺跡－第5次発掘調査概報－』同 1983年

註4 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一『水沢遺跡群範囲確認調査－昭和60年度発掘調査概報－』同 1986年

註5 伊藤・佐久間・土沼『水沢遺跡群範囲確認調査－昭和61年度発掘調査概報－』同 1987年

註6 伊藤・佐久間・土沼『水沢遺跡群範囲確認調査－昭和62年度発掘調査概報－』同 1988年

註7 伊藤・佐久間『水沢遺跡群範囲確認調査－昭和63年度発掘調査概報－』同 1989年

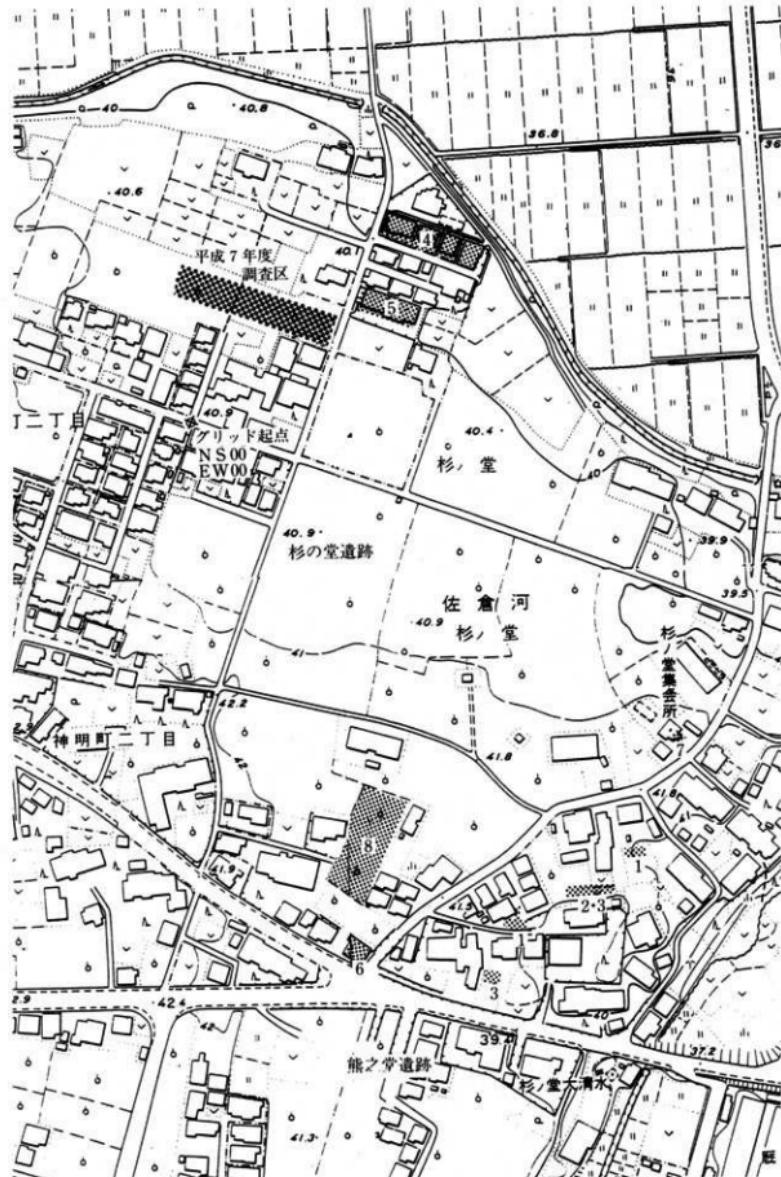
註8 伊藤・佐久間・及川尚『水沢遺跡群範囲確認調査－平成3年度発掘調査概報－』同 1992年

註9 伊藤・佐久間『水沢遺跡群範囲確認調査－平成元年度発掘調査概報－』同 1990年

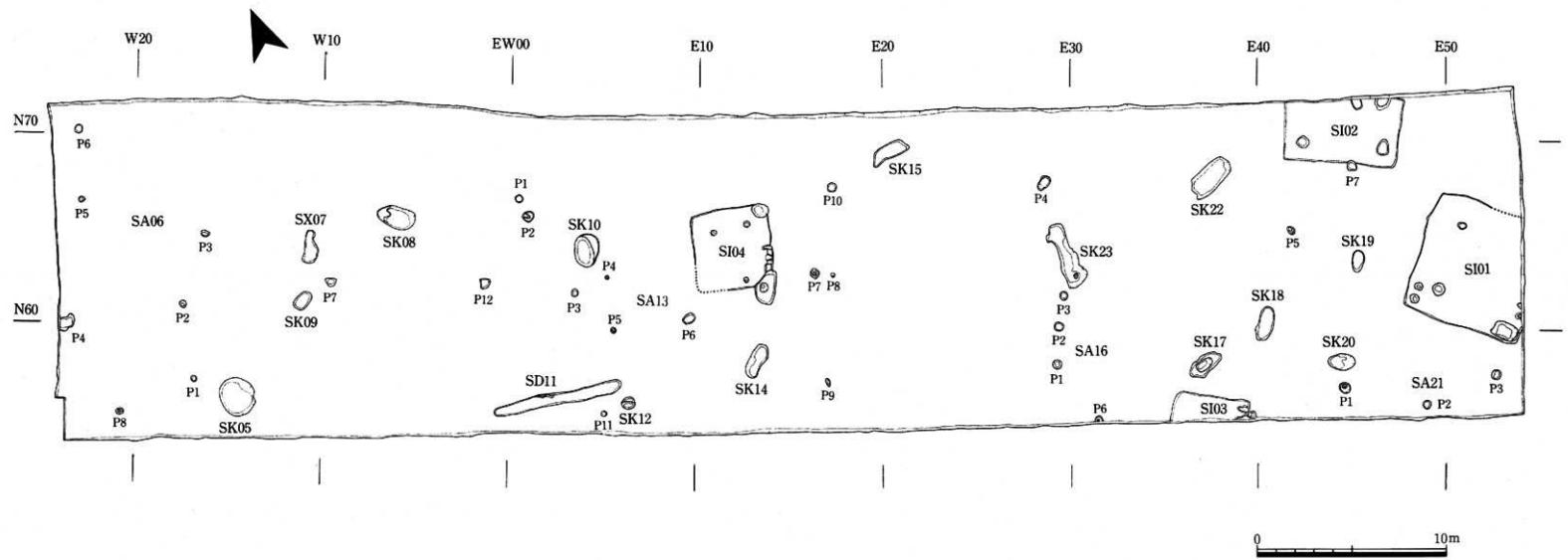
註10 前掲註9文献でカマド部分が検出された1棟を除く。



第1図 遺跡位置図 (1 : 25,000)



第2図 杉の堂遺跡周辺地形図 (1 : 2,500)



第3図 杉の堂遺跡遺構配置図

II. 遺構・遺物

検出された遺構には、竪穴住居跡4棟、土坑跡14基、溝跡1条、ピット群などがある。以下、遺構と遺物について記述する。

S101竪穴住居跡（第3・4図 図版3・4）

調査区東端に位置し、住居跡東壁は調査区外に伸びる。平面は隅丸方形で、南壁で主軸はE44°33'S、西壁で6.4mを測る。埋土は地山砂礫を多量に含む10YR1.7/1黒色土の単層である。壁高は0.03mと極めて浅い。床面はカマド前面に焼土・炭化粒が散る面があり、それを囲むようにカマドを中心としてやや堅い床面が半楕円状に広がる。また、貼床と考えられる硬質の黄褐色粘質土面が確認できる。カマドは東壁南寄りに位置し、煙道・煙出は調査区外に存在する。カマド袖は木根による搅乱を受け、右袖は残存長0.32m、幅0.31m、高さ0.10m。左袖は精査段階では検出できなかったが、調査区東壁の断面で袖材である黄褐色粘質土を含む幅0.18m、高さ0.07mの層を確認している。検出当初は左袖と考えられた天井崩壊土の遺存状況は良好である。燃焼部は長軸0.12m、短軸0.81m、厚さ0.48mを測る。カマドの埋土は1層7.5YR3/3暗褐色土、2層5YR4/6赤褐色土（硬質火床面）、3層5YR4/8赤褐色土である。

南東隅に位置する住居跡内SK01は貯蔵穴と考えられ、長軸方向は住居跡の南壁に並行する。平面は隅丸長方形を呈し、上幅長軸1.31m×短軸0.84m、下幅長軸0.81～0.84m×短軸0.53～0.62m、深さ0.24mを測る。床面よりピットP1～P4を検出しているが、柱穴と考えられるのはP3・4である。P1は上幅直径0.45～0.49m、P2は0.39～0.42m、P3は0.61～0.68m、P4は0.35～0.45mを測り、埋土はP1・2は10YR3/1黒褐色土、P3・4は10YR2/3黒褐色土である。

出土遺物（第5図 図版13）

カマド焚口より土師器・須恵器環、カマド右袖より土師器甕・貯蔵穴と考えられるSK01の検出面付近の壁に落ち込んだ状況で土師器環・高台環・蓋・甕、須恵器環・高台環を検出している。このほかに長頸壺片がある。

土師器

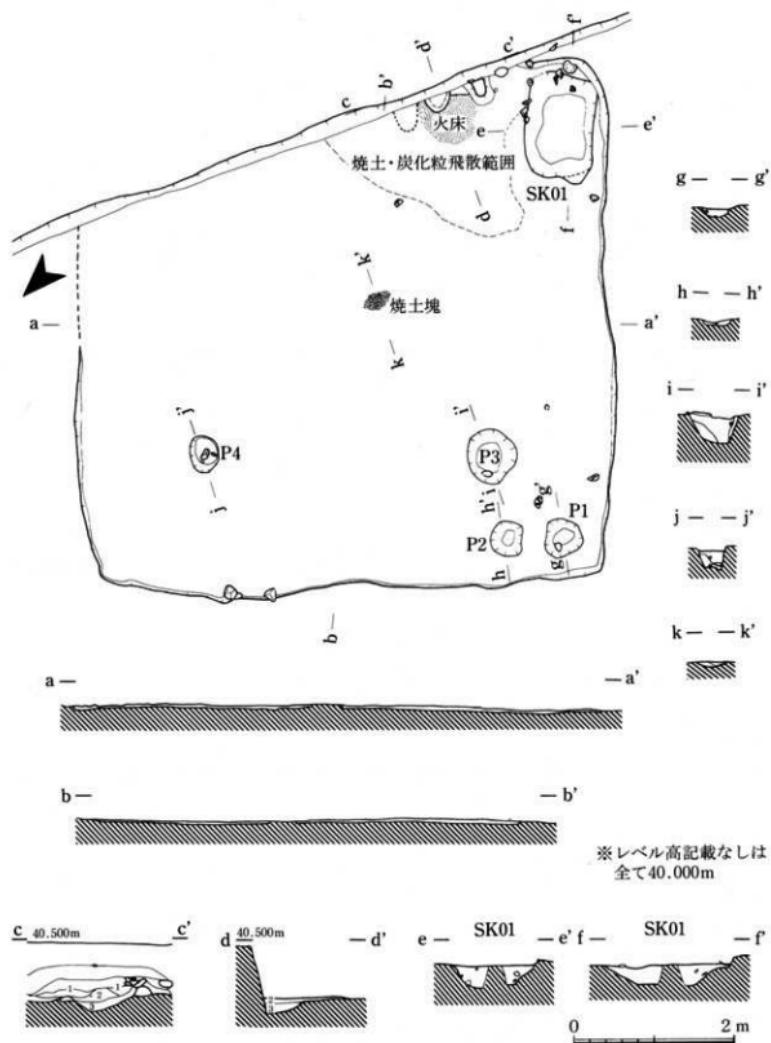
环 8点出土しており、3形態に分類される。いずれも内面は黒色処理を施す。

1は外面を底部で回転ヘラ切りしたのち体部下半を横位にヘラケズリする丸底の环である。口径13.7cm、器高3.9cmを測る。内面には横位ヘラミガキを施す。色調は5YR7/6橙色を呈し、胎土やや緻密で焼成良好。

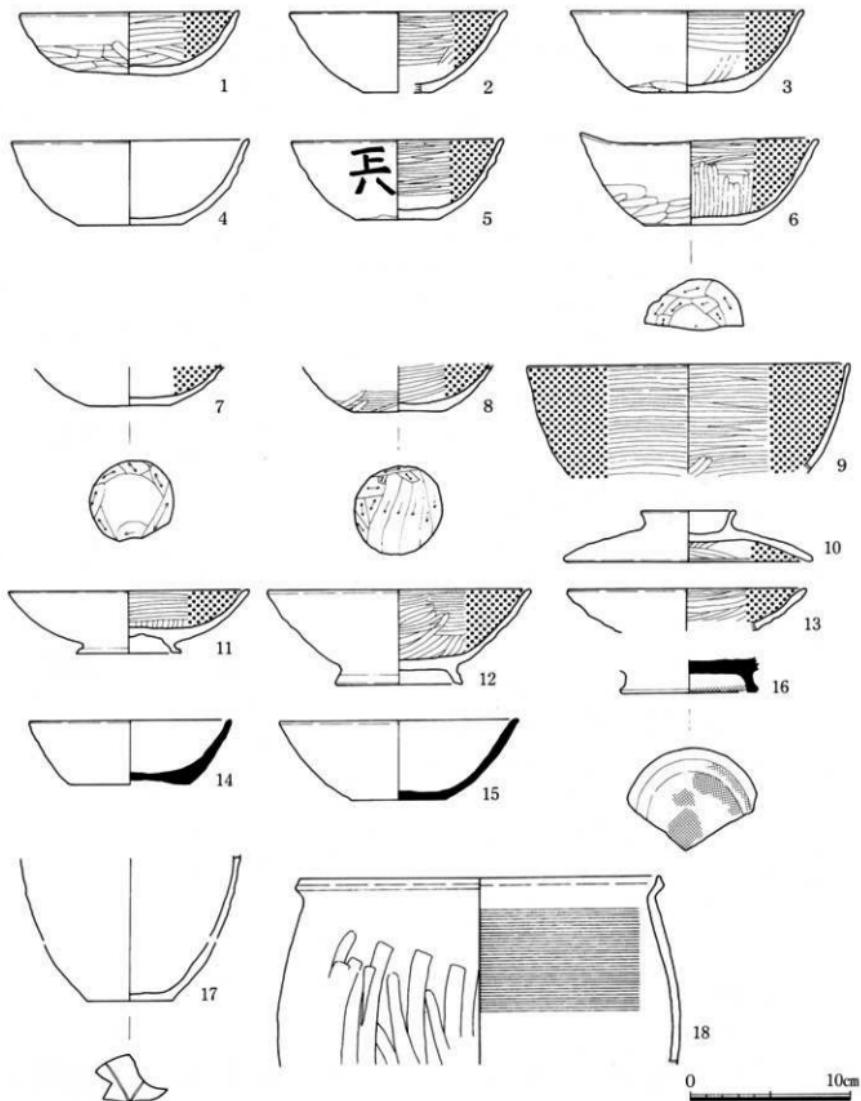
2は口径に対して底部が小さく、口径13.6cm、底径4.4cm、器高5.0cmを測る。底面外側は切り離したのちヘラケズリ調整する。内面は放射状ヘラミガキののち上方に横位ヘラミガキを施す。色調は10YR7/4にぶい黄橙色を呈し、胎土緻密で焼成良好。

3～8は2より底径の大きい环である。3は口径14.6cm、底径5.8cm、器高5.1cmを測る。外面の底部付近を横位にヘラケズリする。底部切り離しは回転糸切りで、一部にヘラケズリを施す。内面上半は横位ヘラミガキがみられ、その下半には放射状ヘラミガキの痕跡を確認できる。色調は7.5YR7/6橙色を呈し、胎土緻密で焼成良好。4は口径14.8cm、底径6.6cm、器高5.3cmを測る。内面の黒色処理は二次加熱により消失している。底部切り離しは回転ヘラ切りで、体部下端を回転ヘラケズリする。色調は7.5YR6/6橙色を呈し、胎土緻密で焼成不良。5は口径13.2cm、底径5.4cm、器高5.0cmを測る。底部切り離しは回転糸切りののち外周を一部ヘラケズリする。外面体部上方に「天」の墨書きとタール状の付着物が見られる。色調は7.5YR7/4にぶい橙色を呈し、胎土緻密で、焼成良好。6は口径14.9cm、

底径6.1cm、器高5.1～5.8cmを測る。底部は回転糸切りのうち周辺のみヘラケズリを施し、さらに体部下半を横位にヘラケズリする。内面は下半を放射状、口縁付近を横位にヘラミガキする。色調は7.5YR 7/4にぶい橙色を呈し、胎土緻密で焼成良好。7は埋土中出土で底径5.2cm、現存高2.5cmを測る。底部切り離しは回転糸切りのうち周辺部にヘラケズリを施す。内面は摩滅が著しいが、見込みに放射状へ



第4図 SI01堅穴住居跡



第5図 S101堅穴住居跡出土遺物

ラミガキの痕跡が見られる。7.5YR7/6橙色を呈す。胎土は若干砂粒を含むが密で、焼成良好。8は埋土中出土で底径5.4cm、現存高2.9cmを測る。底部切り離しの後不定方向に手持ちヘラケズリし、内面は横位へラミガキを施す。10YR7/4にぶい黄橙色を呈し、胎土は微砂質で、焼成良好。

鉢 9はカマドから出土した内外面黒色処理の鉢で、底部を欠く。推定口径20.2cm、現存高7.9cmである。器壁の剥落が著しいが、内外面ともに横位へラミガキが観察できる。

盞 10は口径15.6cm、底径6.0cm、器高3.2cm。坏部を回転ヘラ切りし、つまみ部分にはロクロ回転による横ナデを施す。内面は放射状にヘラミガキし、口縁付近を横位へラミガキする。色調は7.5YR7/6橙色を呈し、胎土はやや緻密で、焼成良好。

高台坏 3点検出しているが、いずれも内面は放射状へラミガキのち上方を横位へラミガキし、黒色処理を施す。11と12の底部外面には菊花状の高台貼付痕がある。

11は口径15.0cm、底径6.6cm、器高3.9cmを測る。色調は10YR4/6にぶい橙色を呈し、胎土緻密で焼成良好。12は口径16.6cm、高台底径8.0cm、器高5.9cmを測る。色調は7.5YR7/6橙色を呈し、胎土緻密で焼成良好。13は高台を欠損する坏部で、口径15.0cm、現存高2.6cmを測る。色調は7.5YR6/6橙色を呈し、胎土緻密で、焼成良好。

甕 2点検出している。17は口縁～体部上半を欠く小型甕で底径5.4cm、現存高9.0cmを測る。底部切り離しは回転糸切り無調整で、「×」のヘラ書きがある。体部はロクロ成形で、内外面に部分的に有機物の付着が見られる。色調は10YR8/4浅黄橙色を呈す。胎土は砂粒多く、焼成良好。18は体部～底部を欠損する長胴甕で、ロクロ成形後外面に継位へラケズリ調整、内面に口縁部に横ナデ調整、体部に目の細かい小口による横位ハケ目を施す。口径23.0cm、現存高11.9cmを測る。色調は7.5YR7/4橙色を呈し、胎土は若干粗砂混入し焼成良好。

須恵器

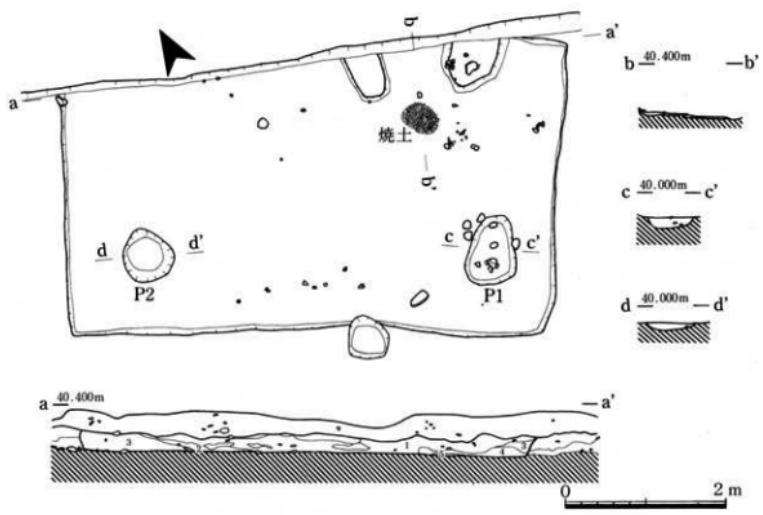
坏 2点出土しているが、いずれも底部切り離しは回転糸切り無調整である。14は口径12.6cm、底径7.2cm、器高4.0cm。色調は10YR7/3にぶい黄橙色を呈し、胎土は粗砂混入し、焼成不良。15は口径15.0cm、底径6.0cm、器高5.0cmを測る。全体の色調は7.5Y5/1灰色を呈するが、外面口縁部には5Y7/3浅黄色地に7.5YR4/3褐色が斑状に入る。胎土緻密で、焼成良好。

高台坏 16は高台部は2/3が遺存する。底径8.4cm、現在高2.1cmを測る。坏部切り離しは回転ヘラ切り無調整である。底部外面に墨痕が見られることから、硯に転用したものと考えられる。色調は7.5Y6/1灰色を呈し、胎土緻密で、焼成良好。

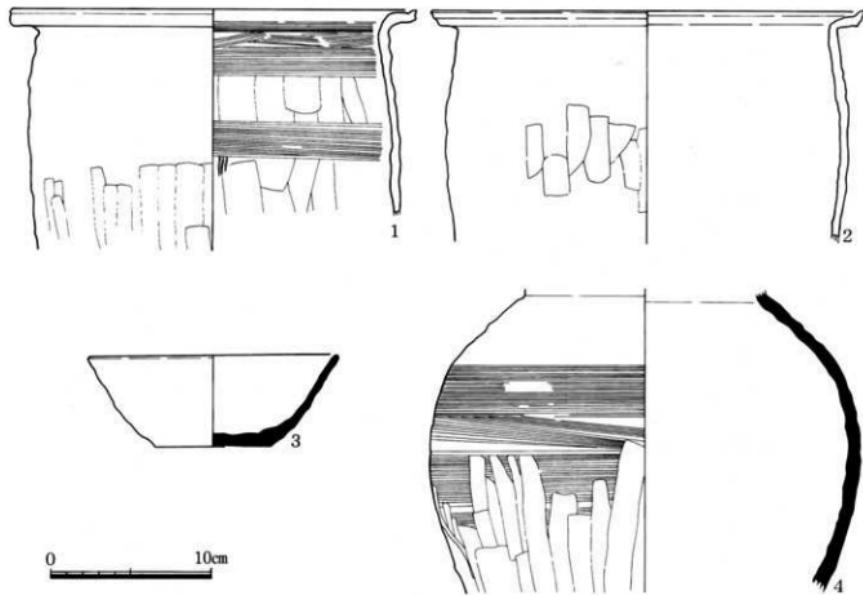
このほか8世紀後半の有段土師器片と球胴の甕体部片を検出している。

S102堅穴住居跡（第3・6図 図版4・5）

調査区北東隅近くより検出された住居跡である。四隅のうち北西隅を含む北壁の大部分は調査区外に伸びるため不明である。検出部分の計測では東西6.7m、南北3.7mの長方形を呈する。南壁の計測で磁北に対しE23°55'S傾く。壁高は0.03mでやや外傾きみに立ち上がる。南辺の1部をピットに切られる。カマドは北壁東寄りに付設するが、煙道等詳細は調査区外にかかるため不明である。検出部分では右袖は幅0.65m、高さ0.07m、長さ0.62mあり、左袖は幅0.43m、高さ0.02m、長さ0.56mある。両袖とも黒色土で構築し、黄褐色粘質土と混ぜたもので覆う。全体的に火熱による変色は弱い。カマド南方にカマド崩壊土と思われる黄褐色粘質土ブロック（径0.2m）と焼土ブロック（径0.4m）が存在する。床面は黄褐色砂礫層を掘削して作られ、貼床状に黒色土を叩きしめて平坦にしていたと思われるが、遺存するのは東側の4分の1程度である。住居内埋土は5層に分かれ、1層10YR2/2黒褐色



第6図 SI 02堅穴住居跡



第7図 SI 02堅穴住居跡出土遺物

土、2層は1層より茶色みがかった10YR2/3黒褐色土、3層10YR3/1黒褐色土、4層灰白色粘土塊・焼土粒を若干含む7.5YR3/1黒褐色土（カマド崩壊土）、5層7.5YR2/1黒色土（カマド構築土）である。

住居内ピットはP1・P2が検出された。P1は直径0.85m×0.53mの不整形で深さ0.15m、P2は径0.65mの円形で深さ0.1mある。埋土はP1が焼土混じりの10YR2/3黒褐色土、P2が10YR3/1黒褐色土である。

出土遺物（第7図 図版14）

土器器坏・甕・鉢、須恵器坏・甕・壺などを検出している。

土器器

甕 図示できるのはロクロ使用の2点で、ともに胸部上半から口縁部が遺存し、緩く内湾する胸部から頸部で直角的に外反し、口縁端部を外反しながら、やや丸く上方に挽き出す形状を取る。2はカマド内埋土中から出土。内面胸部は継位ヘラナデ後横位ハケ目が施され、外面胸部には継位ヘラケズリが施される。胎土は細砂混じるがやや密で、焼成良好、7.5YR7/2明褐灰色を呈する。推定口径25.2cm、推定頸部径21.9cm。3はS102住居跡検出面から出土。外面胸部に継位ヘラケズリが施される。胎土は粗砂全体に混じり、焼成良好。外面は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は7.5YR4/2灰褐色を呈する。推定口径27.2cm。推定頸部径23.8cm。

須恵器

坏 1はカマド右袖上から出土し、体部の8分の1弱を欠損する。内湾して立ち上がった体部は直線的に外傾し、口縁端部を丸く收める。底部は回転糸切り無調整。内外面に灰～黒色の火捺痕がある。胎土は小礫・粗砂が全体に混じるがやや密で、焼成良好。内外面とも口縁部は2.5Y7/1灰白色、底部～体部は5Y5/1灰色を呈する。口径15.3cm、底径7.2cm、器高5.7cm。

壺 4はカマド右袖上から出土。胸部上半～頸部下端のうち4分の1弱が遺存する。胸部は大きく内湾し、頸部で上方に挽き出される。最大径をもつ胸部中ほどに沈線状の段が巡り、その上下に横位ハケ目が施され、段の下方に継位ヘラケズリが施される。胎土は小礫・粗砂が全体に混じり、焼成はやや良。内面5Y5/1灰色、外面は5Y6/1灰色を呈する。推定最大胴径27.0cm。

S103堅穴住居跡（第3・8図 図版5・6）

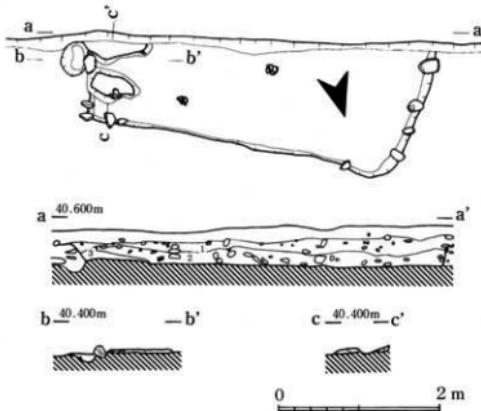
調査区東半、調査区南壁にかかり、全体の3分の1を検出している。平面形は隅丸方形を呈し、主軸は北壁でE33°18' S、東西4.05mを測る。埋土は1層疊を多く含む10YR2/1黒色土、2層疊多く含む10YR2/2黒褐色土である。造構は削平され、壁高は0.03～0.04mである。カマド前面に黄褐色粘質土を用いたやや硬質の貼床状の床面が約1mほど広がるが、その他では地山疊層が露呈する。柱穴は確認できなかった。カマドは東壁北寄りに位置するが、その遺存状況は木根により搅乱をうけ不良である。右袖は残存長0.67m、幅0.41m、高さ0.05mで、左袖は調査区南壁にかかり残存長0.80m、高さ0.10m。煙道・煙出部は搅乱により不明。袖の内壁は若干焼けているが、火床面は不明瞭である。

出土遺物（第9図 図版14）

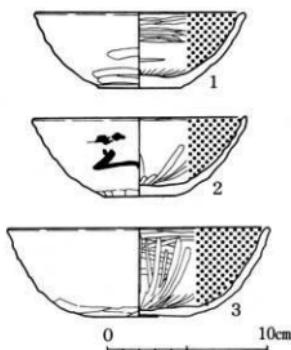
土器器坏・甕、須恵器坏・甕、縄文土器片を検出している。

土器器

坏 1・2とも床面より出土。1は底部から内湾して立ち上がり、口縁端部で内側にやや肥厚し、外反する。内面は横位のヘラミガキ、見込み部分は放射状ヘラミガキが施された後、黒色処理される。外面体部下端はヘラケズリされ、底部は回転糸切り無調整である。胎土は微砂質、焼成は良、色調は10YR7/4にぶい黄橙色。推定口径12.9cm、底径5.2cm、器高4.8cm。2は内湾して立ち上がり、口縁端



第8図 SI03堅穴住居跡



第9図 SI03堅穴住居跡出土遺物

部を丸く收める。内面は横位ヘラミガキ後、体部中ほどに至る放射状ヘラミガキが施され、黒色処理される。外面は体部下端にヘラケズリされ、底部は回転糸切り無調整。外面体部に墨書がある。胎土は微砂質、焼成は良、色調は10YR7/1にぶい黄橙色。口径13.2cm、底径4.4cm、器高4.9cm。3はカマド左袖上から出土。内湾して立ち上がり、口縁端部をやや外反して丸く收める。内面は横位ヘラミガキ後、体部上半に至る放射状ヘラミガキが施され、黒色処理される。外面は体部下端に不定方向ヘラケズリされ、底部は回転糸切り無調整。胎土は若干粗砂混じり、焼成は良、色調は10YR7/4にぶい橙色。推定口径16.2cm、底径6.2cm、器高5.5cm。

S104堅穴住居跡（第3・10図 図版6・7）

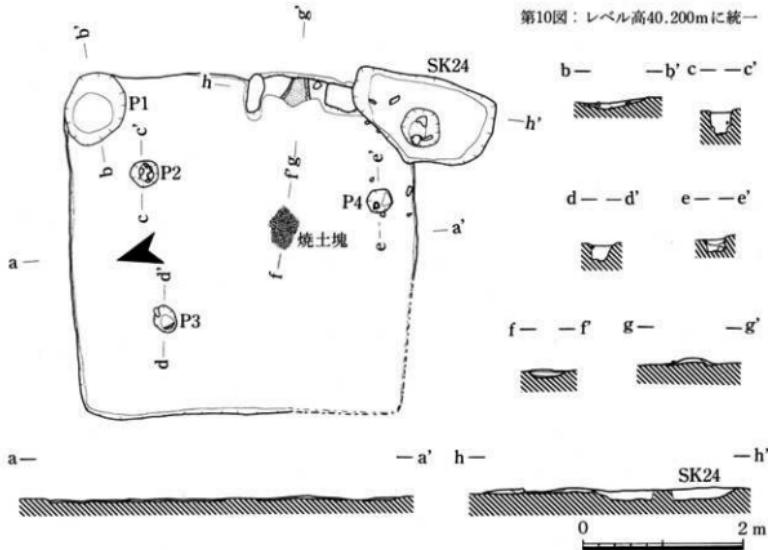
調査区中央より検出された住居跡である。四壁のうち西壁南側と南壁西側は、削平のため明確にはできなかった。規模は東西4.15m、南北4.3mの隅丸方形と考えられる。北壁の計測で磁北に対しE14°10' S傾く。壁高は0.03mで四壁とも垂直に立ち上がる。カマドは東壁南寄りに付設するが、煙道等詳細は著しい削平のため不明である。右袖は検出されなかつた。左袖は幅0.2m、高さ0.05m、長さ0.5mで、黒色土で構築された上に黄褐色粘質土と黒色土を混ぜたもので覆う。カマド中央に長軸0.37m×短軸0.25m、厚さ0.02mの硬質焼土面（火床）が存在する。床面は黄褐色砂礫層を掘削して作られ、貼床状に黒色土を叩きしめて平坦にしている。西側4分の1程度は貼床は遺存しない。住居内埋土は10YR2/2黒褐色土の単層である。

南東隅に位置するSK24は貯蔵穴と考えられ、長軸方向は住居跡の東壁に並行する。平面は不整形を呈し、上幅で長軸1.81m×短軸1.08m、深さは0.16mのところで平坦面となり、径0.3mの円形の落っこみに続く。最大深0.38m。埋土は、炭化粒・焼土粒が若干混じる10YR1.7/1黒色土の単層である。住居内ピットはP1～P4が検出された。P1は長軸0.91m×短軸0.74mの楕円形で、深さ0.13mある。P2～P4は径0.3m前後の円形で、深さはP2が0.19m、P3が0.12m、P4が0.15mある。埋土は黒褐色土の単層である。主柱穴はP2～P4である。南西隅からはピットは検出されなかつた。

出土遺物（第11図 図版14）

土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。

第10図：レベル高40.200mに統一



第10図 SI04堅穴住居跡

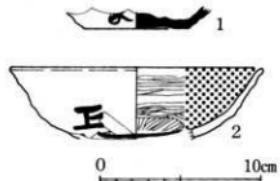
土師器

壺 2はSK24埋土中から出土。口縁部～体部の3分の2が遺存する。内湾する体部から口縁部に至り、端部でやや外反して丸く收める。内面は体部が横位へラミガキ、見込み部分は放射状へラミガキが施された後、黒色処理される。外面体部下半に墨書「天」がある。胎土は微砂質、焼成は良好、色調は10YR6/4にぶい黄橙色。推定口径15.8cm。

須恵器

壺 1はP4埋土中から出土。壺の底部～体部下端が遺存する。体部下端部分に墨書がある。底部は回転糸切り無調整。胎土は密、焼成は良好、色調は5Y6/1灰色である。底径6.6cm。

第11図 SI04堅穴住居跡出土遺物



第11図 SI04堅穴住居跡出土遺物

SK05土坑跡（第3・12図 図版8）
調査区西南隅近くに位置する。平面は上幅で径1.9m前後、下幅径1.6mの円形で、深さは0.22mある。概ね平坦な底部より、ややゆるく外傾して立ち上がり、壁高は0.18mある。礫層を掘り込んでおり、埋土は小礫混じりの10YR1.7/1黒褐色土の単層である。遺物は縄文土器・土師器の小片がある。

SX07土坑跡（第3・12図 図版8）

調査区西半に位置する。平面は南北方向に長い不整形を呈し、上幅で長軸1.72m×短軸0.5m、下幅で長軸1.66m×短軸0.36m、深さは0.28mある。礫層を掘り込んでおり、底部は礫が多量に露出し、凹凸がつく。壁は明瞭な立ち上がりを持たず、ゆるく内湾して立ち上がる。埋土は1層10YR1.7/1黒色土、2層10YR1.7/1黒褐色土で、いずれも礫を含む。遺物はない。

SK08土坑跡（第3・12図 図版8）

調査区西半に位置する。平面は北西－南東方向に長い楕円形を呈し、上幅で長軸2.05m×短軸1.1m、下幅で長軸1.3m×短軸0.92m、深さは0.27mある。礫層を掘り込むが、底部は概ね平坦である。西壁の立ち上がりは明瞭でなく、なだらかに立ち上がる。他の壁はゆるく内湾して立ち上がる。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層で、遺物はない。

SK09土坑跡（第3・12図 図版9）

調査区西半に位置する。平面は北東－南東方向に長い楕円形を呈し、上幅で長軸1.05m×短軸0.7m、下幅で長軸0.92m×短軸0.57m、深さは0.15mある。礫層を掘り込む。底部は概ね平坦である。壁はゆるく内湾して立ち上がる。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層で、遺物はない。

SK10土坑跡（第3・12図 図版9）

調査区中央に位置する。平面は南北方向に長い楕円形を呈し、上幅で長軸1.73m×短軸1.27m、下幅で長軸1.25m×短軸0.6m、深さは0.26mある。壁面は丁寧に掘削され、ゆるく内湾して立ち上がる。北東辺はいったん立ち上がった後、平坦面となり再び立ち上がる。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層で、遺物はない。

SK12土坑跡（第3・12図 図版10）

調査区中央南寄りに位置する。平面は径0.6m前後の円形で、南側に長軸0.57m×短軸0.25mの落ち込みを持つ。壁は角度を持って立ち上がる。埋土は小礫混じりの10YR1.7/1黒色土の単層であり、遺物はない。

SK14土坑跡（第3・12図 図版10）

調査区中央に位置する。平面は北東－南西方向に長い不整形を呈し、上幅で長軸1.84m×短軸0.75m、下幅で長軸1.56m×短軸0.32m、深さは0.18mある。底部は概ね平坦で、壁はやや角度を持って立ち上がる。埋土は1層が小礫・粗砂混じりの10YR1.7/1黒色土、2層小礫混じりの10YR2/2黒褐色土、3層小礫混じりの10YR1.7/1黒色土である。遺物はない。

SK15土坑跡（第3・12図 図版10）

調査区中央北寄りに位置する。平面は東西に長い不整形で、上幅で長軸2.1m×短軸0.75m、下幅で長軸1.9m×短軸0.67m、深さは0.13mある。底部は概ね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層である。遺物はない。

SK17土坑跡（第3・12図 図版11）

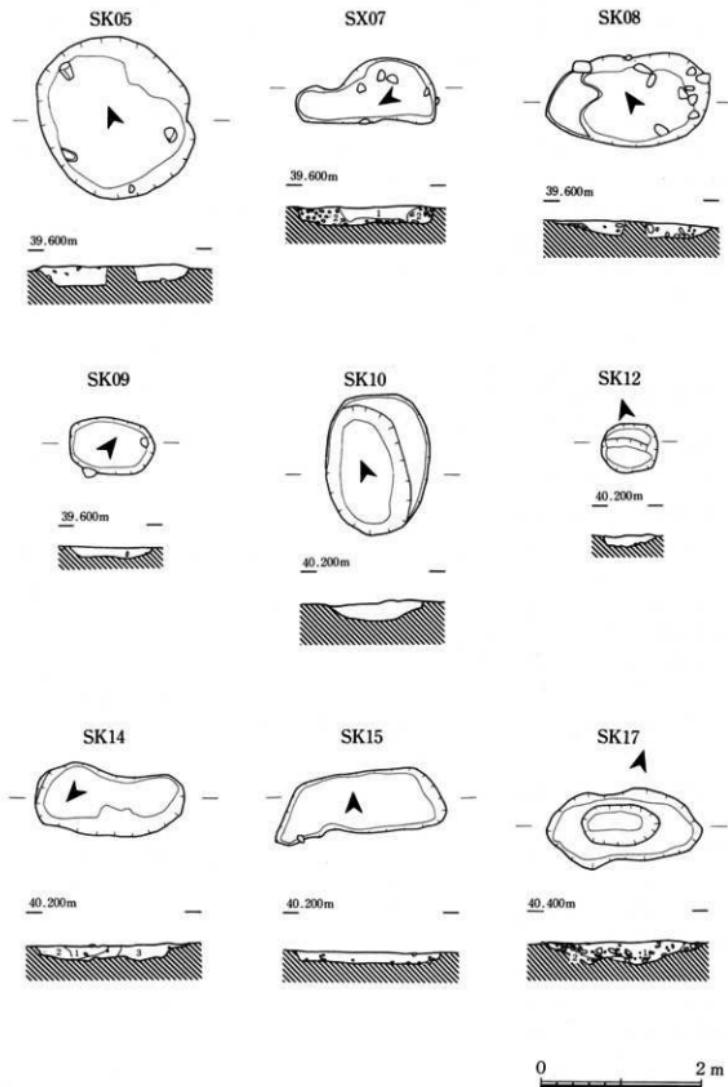
調査区東半南寄りに位置する。遺構は東西に長い楕円形を呈し、上幅で長軸1.93m×短軸0.88m、下幅で長軸0.96m×短軸0.50m、深さは0.28mある。遺構は礫層を堀り込み、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は1層10YR1.7/1黒色土、2層10YR2/3黒褐色土で、礫が多量混入する。遺物はない。

SK18土坑跡（第3・12図 図版11）

調査区東半南寄り、SI03竪穴住居跡の北側に位置する。平面は長い楕円形を呈し、壁は丸味を帯びて立ち上がる。上幅で長軸1.84m×短軸0.84m、下幅で長軸1.56m×短軸0.72m、深さは0.24mある。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層である。遺物はない。

SK19土坑跡（第3・12図 図版11）

調査区東半南寄りに位置する。平面は東西方向に長い楕円形を呈し、上幅で長軸1.88m×短軸0.90m、下幅長軸1.70m×短軸0.70m、深さは0.19mある。遺構は礫層を堀り込み、ほぼ平坦な床面から壁はほぼ直立する。埋土は小礫の混じる10YR2/1黒色土の単層である。遺物はない。



第12図 杉の堂遺跡土坑跡（1）

SK20土坑跡（第3・12図）

調査区東半南壁寄りに位置する。平面は東西方向に長い楕円形を呈し、上幅で長軸1.41m×短軸0.89m、下幅長軸0.74m×短軸0.54m、深さは0.23mある。遺構は礫層を堀り込み、ほぼ平坦な床面から東壁は緩やかに、西壁は急に立ち上がる。埋土は1層10YR1.7/1黒色土、2層10YR2/2黒褐色土で、いずれも礫が混入する。遺物はない。

SK22土坑跡（第3・12図 図版12）

調査区東半北寄りに位置する。平面は北東—南西方向に長い隅丸長方形を呈し、上幅で長軸2.39m×短軸1.14m、下幅で長軸2.17m×短軸0.86m、深さは0.31～0.40mある。遺構は礫層を堀り込み、ほぼ平坦な床面から東壁は緩やかに、西壁は急に立ち上がる。埋土は1層10YR1.7/1黒色土、2層10YR2/2黒褐色土で、いずれも礫を多量に混入する。遺物はない。

SK23土坑跡（第3・12図 図版12）

調査区東半の北寄りに位置する。平面は北東—南西方向に長い隅丸長方形を呈し、上幅で長軸2.39m×短軸1.14m、下幅で長軸2.17m×短軸0.86m、深さは0.08～0.37mある。遺構は礫層を堀り込んでおり、北側は浅く緩やかに、南側はやや外傾して立ち上がる。埋土は1層10YR1.7/1黒色土、2層10YR3/3暗褐色土である。遺物はない。

SD11溝跡（第3・12図 図版12）

調査区中央南寄りに位置する。長軸は東西で6.87mあるが、東西端とも削平のためそれ以上の延長はできなかった。幅は0.55m前後ある。底部は概ね平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は10YR2/1黒色土の単層である。遺物はない。

SA06ピット群（第3図）

調査区西側、SK08土坑跡以西に位置する。P1～P8を検出。形態は円形（P1・P2・P6）、楕円形（P3・P5・P8）、不整形（P4・P7）の3形態がある。直径は最小で0.34m、最大で0.55mあり、径0.4mのものが多い。柱痕跡が残るものはなかった。深さは0.1～0.2mに全て収まる。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層である。遺物はP6より、土師器壺底部片が検出された。

SA13ピット群（第3図）

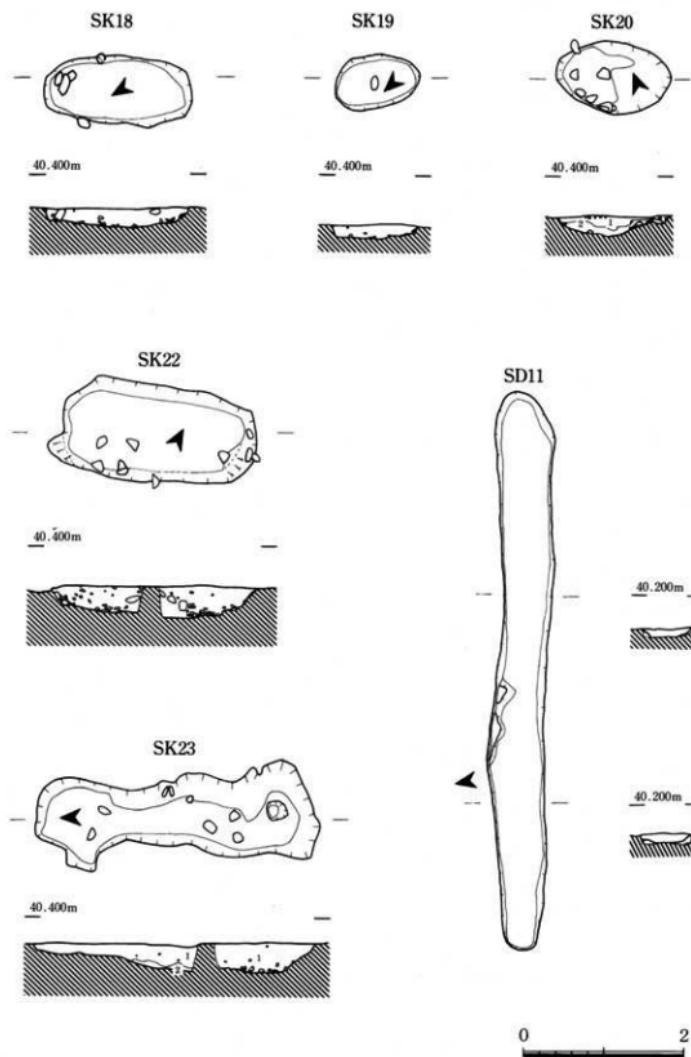
調査区中央、SK08土坑跡～SK15土坑跡の間に位置する。P1～P12を検出。形態は円形（P1～P5・P7・P8・P10・P11）、楕円形（P6・P9）、不整形（P12）の3形態がある。直径は最小で0.21m、最大で0.6mあり、径0.3～0.45mのものが多い。深さは0.05～0.36mある。P7には柱痕跡が残る。埋土はP1が焼土・炭化粒混じりの10YR2/1黒色土の単層で、他は10YR1.7/1黒色土の単層である。遺物はない。

SA16ピット群（第3図）

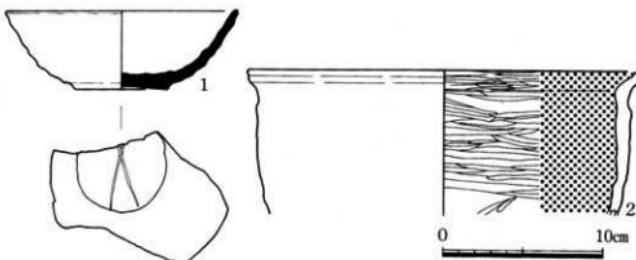
調査区東半に位置する。P1は0.46～0.48m、P2は0.46～0.52m、P3は0.42～0.45mの円形を呈する。P4は長軸0.87m×短軸0.53m、P5は長軸0.45m×短軸0.33mの楕円形を呈する。P6は調査区南壁にかかり長軸0.41m×短軸0.28m。P7はS102堅穴住居跡を切り、やや角張った円形を呈し長軸0.56m×短軸0.50m。埋土はP1～6は10YR1.7/1黒色土、P7は10YR2/2黒褐色土である。出土遺物はない。

SA21ピット群（第3図）

調査区東半、S101堅穴住居跡の南に位置する。いずれも平面形は円形を呈し、P1は径0.57～0.60m、P2は0.42～0.50m、P3は0.50～0.53mを測る。埋土は10YR1.7/1黒色土の単層である。遺物はない。



第13図 杉の堂遺跡土坑・溝跡（2）



第14図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第14図）

遺構外であるが、遺構検出面から土師器甕、須恵器坏が出土した。

土師器

甕 2は口縁部から体部上半の6分の1が遺存する。推定口径24.4cm、推定頸部径23cmある。頭部で外反し、端部を細く上に挽き出す。内面は密なヘラミガキが施され、黒色処理される。胎土は密、焼成は良好、色調は10YR6/4にぶい黄橙色である。

須恵器

坏 1は全体の4分の1が遺存。推定口径14.4cm、底径5.8cm、器高4.9cmある。底部から内湾して立ち上がり、口縁部を丸く収める。内外面ともに火ழ痕がある。底部は回転糸切り無調整で、外面に「×」のヘラ書きがある。胎土はやや密、焼成は良、色調は5Y6/1灰色である。

III. まとめ

本年の発掘調査では、竪穴住居跡4棟と土坑・溝跡、ピット群などが検出された。このうち住居跡4棟から出土した土器から年代を考えていきたいが、流れ込みとみられる小片を除き、全てロクロ使用で須恵系土器はみられなかった。

S101住居跡からはカマド、貯蔵穴を中心に多くの土器が出土した。このうち坏は口径13.2~14.9cm、底径5.0~6.1cmの範囲に収まるものがほとんどであった。中には丸底の坏（第5図1）、底径の広い坏（同14）、底径が縮小した坏（同2）もみられたが、高台坏、高台皿、蓋、両面黒色処理の鉢の存在から、昭和61年度調査時の^(註1)Ⅲ群に該当し、中でも9世紀第4四半期初めに位置付けられるものである。

これに比べるとS102住居跡は、S101住居跡よりも法量の大きな坏（第3図3）と口径25cmを超す大型の長胴甕（同1・2）の存在から、S101住居跡よりやや古い形態を示し、9世紀中葉の年代に位置付けたい。

S103住居跡は、S102住居跡の坏にも似た法量の大きな坏（第8図3）、S101住居跡で主流を占める形態の坏（同1）、口径に対する底径が縮小した坏（同2）がある。法量、特に底径の縮小化がみられることから、S101住居跡と同時期に位置付けたい。

S104住居跡からは、口径が大きく丸底と考えられる坏（第11図2）、底径が6.6cmと縮小しきっていない坏（同1）が出土したことから、S102住居跡とほぼ同時期に位置付けたい。

S101住居跡と遺構外から底部に「×」のヘラ書きをもつ土器が出土した。杉の堂遺跡と同じ段丘上に広がり、南端を接する熊之堂遺跡（第1図）でも同じヘラ書きをもつ土器が出土しているが、市内

でも胆沢城跡や石田遺跡などで出土例があり、今後の類例の増加を俟って検討したい。

S101・04住居跡から壺外面体部に「戸」と墨書きされた土器を検出した。昭和61年度調査時のS177住居跡から「六」もしくは「口八」と墨書きされた土器を検出しているが、これはS101・04住居跡出土の土器と同じ「戸」の1部と考えられる。市内での出土例は他にないが、県内では北上市下谷地B遺跡^(註12)で「戸」・「戸」・「戸」など15点がある。いずれも壺外面体部に書かれることに共通性がある。

検出した土坑・溝跡、ピット群の中で遺物が出土したものもあるが、いずれも小片であったため時代を特定するには至らなかった。

これまでの坂口地区の調査によると、8世紀後半～9世紀末頃の住居跡が検出されている。その内訳は8世紀後半が3棟、9世紀前半が4棟、9世紀後半が11棟、9世紀末以降が4棟であり、9世紀後半を中心に大幅な増加と減少がみられる。本年度検出された4棟の住居跡も9世紀中葉から後半にかけてのものであり、この年代の資料を追加したといえよう。

註11 前掲註5文献

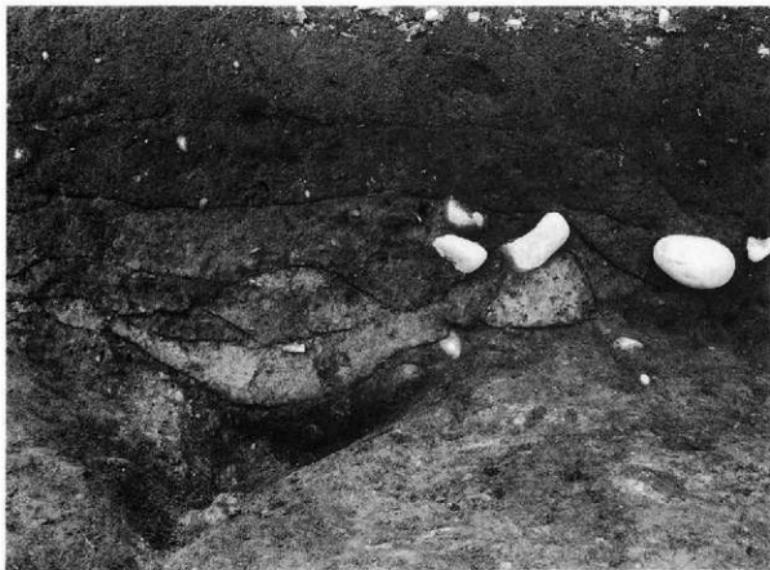
註12 三上昭他『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XⅣ 下谷地B遺跡』岩手県教育委員会 1982年



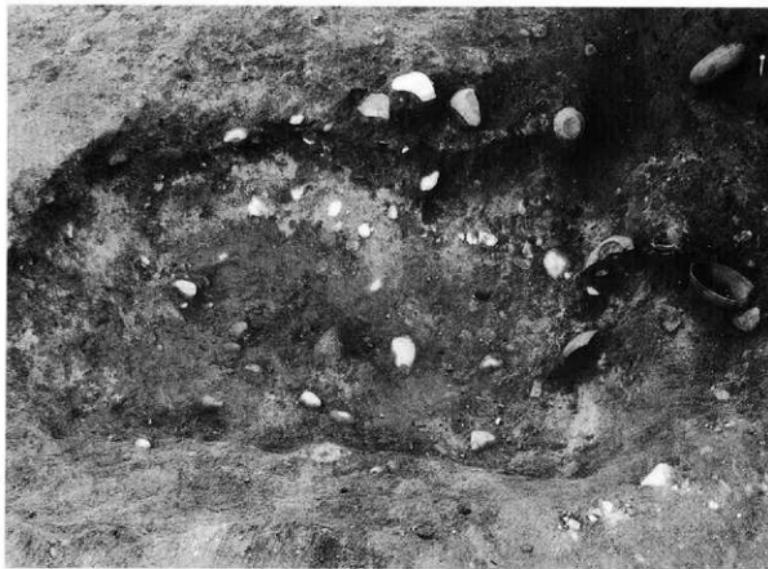
図版1 調査区全景（上空、東から）



図版2 上 調査区東半（上空から）
下 調査区全景（西から）



図版3 上 S101竪穴住居跡
下 同 カマド立割り状況



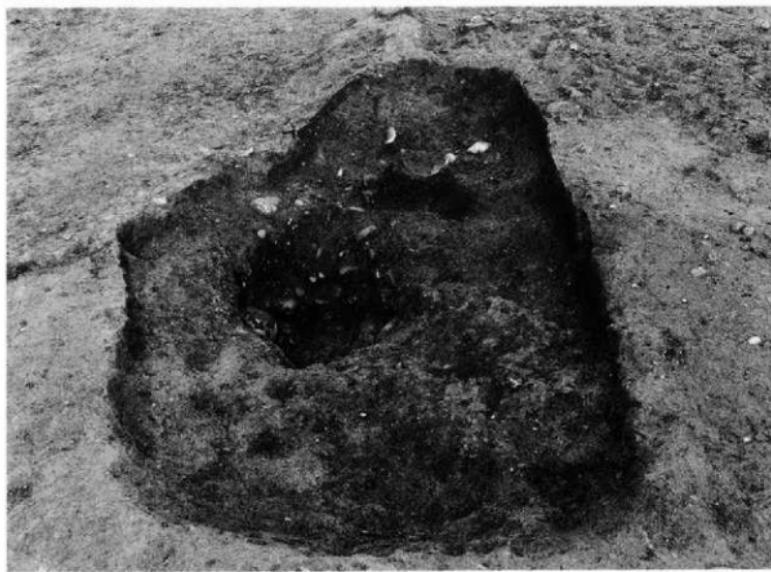
圖版4 上 SI01堅穴住居跡内SK01
下 SI02堅穴住居跡



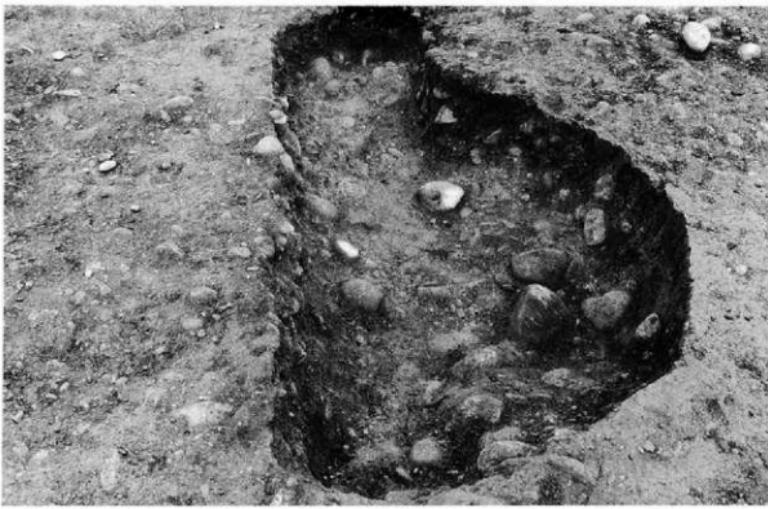
図版5 上 S102堅穴住居跡 カマド検出状況
下 S103堅穴住居跡



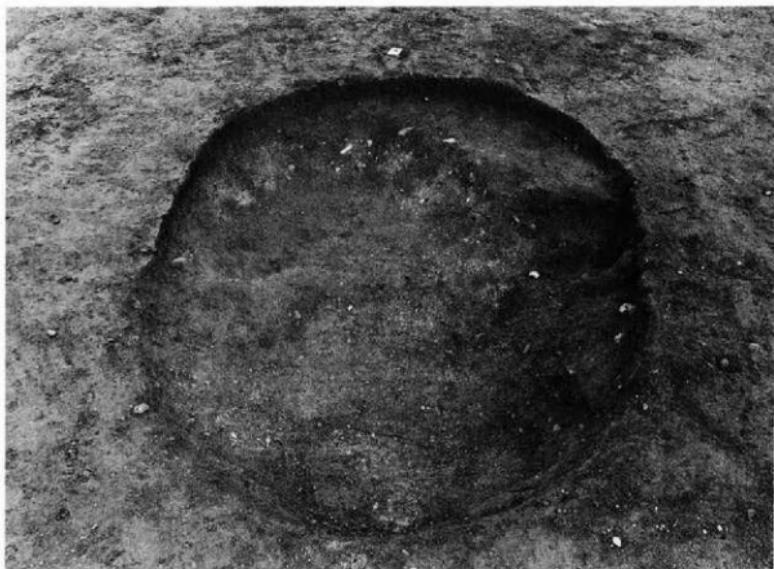
図版6 上 S103竪穴住跡 カマド検出状況
下 S104竪穴住跡



図版7 上 S104堅穴住居跡 カマド検出状況
下 S104堅穴住居跡内 SK24



圖版 8 上 SK05土坑跡 中 SX07土坑跡 下 SK08土坑跡



图版9 上 SK09土坑跡
下 SK10土坑跡



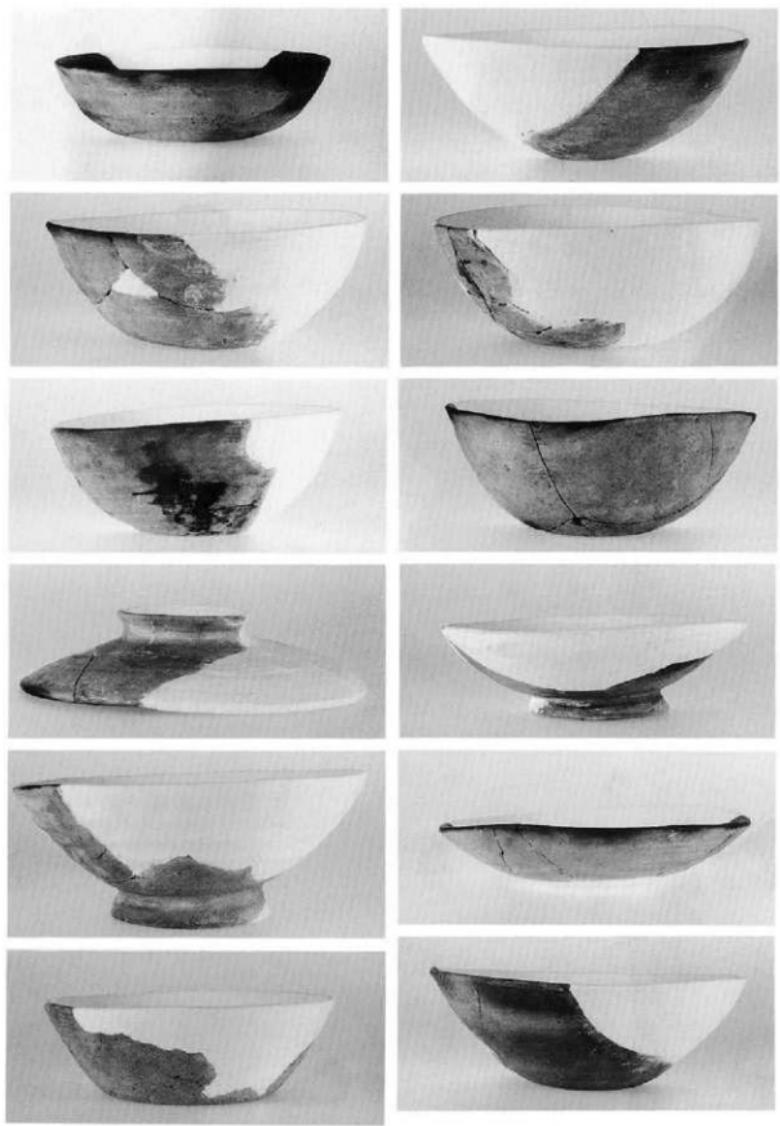
图版10 上 SK14土坑跡
下 SK15土坑跡



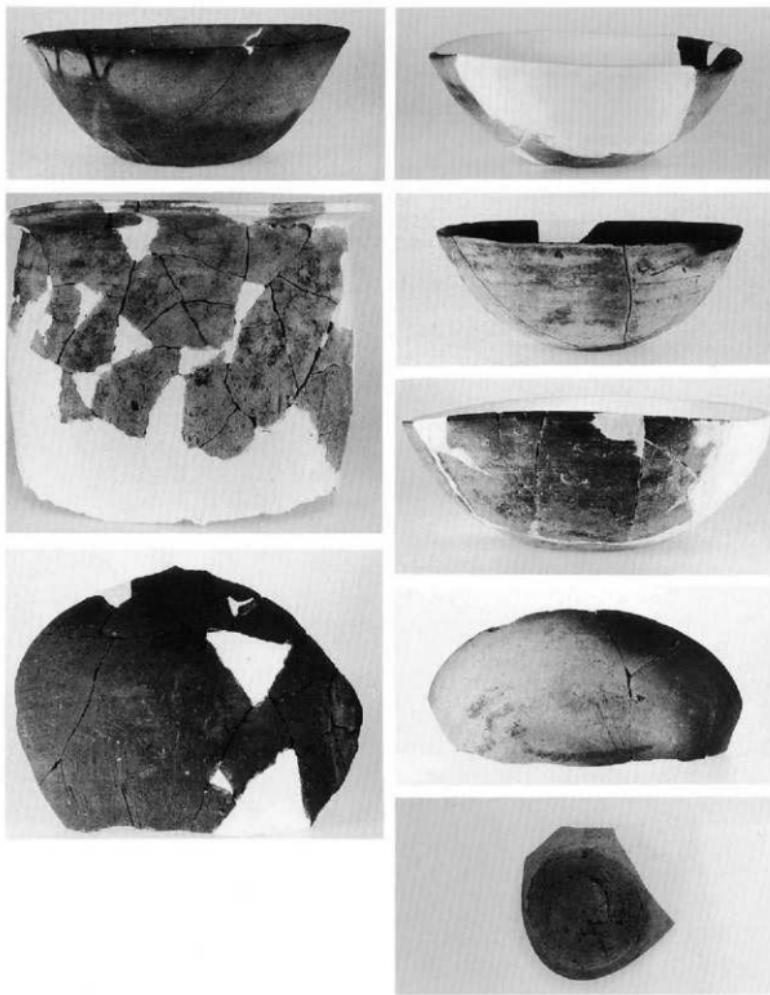
圖版11 上 SK17土坑跡 中 SK18土坑跡 下 SK19土坑跡



圖版12 上 SK22土坑跡 中 SK23土坑跡 下 SD11溝跡



圖版13 S101堅穴住居跡出土遺物



図版14

左 S102堅穴住居跡出土遺物

右 1～3段目 S103堅穴住居跡出土遺物

4・5段目 S104堅穴住居跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すぎのどういせき						
書名	杉の堂遺跡						
略書名							
卷次							
シリーズ名	水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書						
シリーズ番号	第7集						
編著者名	佐々木千鶴子、高橋千晶						
編集機関	勝水沢市文化振興財団 水沢市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒023 岩手県水沢市佐倉河字九藏田96-1 TEL 0197-22-4400						
発行年月日	西暦 1996年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 °' "	東緯 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
杉の堂遺跡	水沢市神明町 二丁目75-1,80	03204 NE27 -0100	39°8'10"	147°10'10"	1995.10.21 ~ 1995.12.10	1,313	宅地造成 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
杉の堂遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡 4棟 土坑・溝跡 ピット群	土師器壊・高台壠 蓋・鉢・甕 須恵器壊・高台壠 甕・壺	9世紀代の集落の様相 を明らかにした。		